
もう一つの「ろーぷれわーど」

ごましお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もっ一つの「ろーぷれわーど」

【Nコード】

N2757Z

【作者名】

ごまじお

【あらすじ】

ごく普通の高校生、鎬正人は、ゲーム「ギヤスパルクの復活」をプレイしていた時にいきなりゲームの中の世界「エターナル」に引き込まれてしまう！正人は自分のもといた世界へ戻るため、使い込んだキャラを使って、冒険する！

作者初執筆なので不満なところだらけだとは思いますが、温かい目で見ただけなら幸いです。

SCENE 1 そんな簡単に信じられるはずがないだろ?!ゲームの世界だなく

作者初の試みです。

気軽に感想をどうぞ。

SCENE 1 そんな簡単に信じられるはずがないだろ?!ゲームの世界だなく

視界の一面を埋め尽くしていた光がだんだんと弱まり、
やっと視力が戻ってきた。

体を支配していた浮遊感から一転、どこかへ降り立ったような感覚
に襲われる。

たまらず俺は屍餅をつき、そこでやっと状況把握できる状態になっ
た。

「つてえ……ここはどこだ?？」

俺は自分の部屋で新しく発売されたゲーム「ギヤスパルクの復活」
をやっていたはずだ。

それがなんで今こんな大自然にかこまれたフィールドみたいな所に
いるんだ?？」

「夢……じゃねえよなあ……マジでどこだよここ……」

どこを見ても人の気配がない……。

それにさっきは夜だったはずだ。なんで太陽が真上にあるんだ?？」

「ギギギギギギギ……」

「?!」

あつぶねえ……

なんだこいつは!？」

俺の眼の前にある物体?はとてもじゃないが人間とは思えない。

強いて言うなら……バツタ?

良く見てみるとそのバツタらしき物の上になにかが表示されてる。

「<トノサマバツタ>だ？」

嘘こけ！

日本のトノサマバツタはこんなでかくないし、襲ってこねえよ！

つてあれ・・・？こんなセリフ俺家でも言ってたような・・・

「うおっ！」

威嚇をしてたと思ったら襲い掛かってきやがった！

「ちょっと待て、なんで襲って・・・ギヤアアア！」

右腕のあたりに痛みが走る・・・と思っただが全然痛くねえ？

どーゆーこった？？

なんて不思議に思う暇もねえ！

またきやがった！

「ファイアーボール！」

俺の後ろから声が出たかと思うと、いきなり火の玉が飛んできた。

え？どゆこと？火の玉？

「ギギギギガアアアアア！」

その火の玉がバツタに当たるとバツタは苦しそうなうめき声を上げて消えた。消えた？いや、なんか金色のコインが出てきたけど・・・バツタは消えた。

「大丈夫かい？」

俺に声をかけてくれたのは日本ではありえない格好をした騎士？のような人だった。さっきのバツタと同じように頭の上に名前？が書いてあった

ゲームみてえだな・・・名前はクリフというらしい。

「ええ〜つと・・・はい大丈夫ですスイマセン。」

「大丈夫ならいいのだが・・・君見慣れない格好をしているね？」

あんたのほうがよくつぽど見慣れないわ！！

とは思ったもののそんな発言をするわけにもいかないのと、とりあえず聞いておけることは聞いておく。

「あなたは・・・どちら様ですか？それよりここはどこですか？？」

「私は王都ガライアの守護兵でクリフと言う者だ。君は・・・マサトというのか？」

どこから来たんだい？」

今どこって言った？王都ガライア？それって・・・

「え〜つと僕は・・・ってなんで俺の名前知ってるんですか！？」

今あっさりスルーしちゃいそうになっただけ、
この人俺の名前知ってたぞ？！

「知ってるもなにも・・・君の上にある名前を読ませてもらっただけだが・・・」

「え？」

俺の上の名前？

おそろおそろ自分の頭の上を見てみると・・・

「な、なんじゃこりゃあ?!」

俺の上には「マサト」という名前表記の下に青いバーが書かれている。

マジでゲームみたいだぞ・・・

「なにやら困惑してるようだな・・・とにかく一回ガライアに来るといい

付いてきなさい」

その後クリフについて草原を歩いた。

そこからは特に変なものも出くわさず歩いていけたのだが・・・。

俺はそんなこと考えてる余裕も無いくらい、焦っていた。

さっき出くわしたバッタといい、この騎士のような人といい、

自分の上のつかってるバーといい・・・

それらの情報から出てくることなど一つしかない。

<ここはゲームの世界ではないか?しかも俺がやっていたゲーム、ギヤスパルクの復活ではないか?>

と俺は本格的に考え始めていた。

@

「うわあ・・・」

色々考え事をしているうちに街についた。
並んだ商店からは客の呼び込みの音が絶え間なく聞こえ続け、
街の喧騒はこの街がどれだけ活気があるかを表していた。

「ようこそ、王都ガライアへ」

俺の隣を馬に乗って歩いてきたクリフからまた「王都ガライア」と
いう

言葉が聞こえた。

やっぱりさつきも聞き間違えじゃなかったんだ。

王都ガライア・・・。

「やっぱり・・・ここはゲーム『ギヤスパルクの復活』の中だ・・・」

「ん？なにか言ったか？」

「いやなんでもないです！」

クリフは不思議なものを見る顔をしていたが
俺としてはそんなことは考えていられない。

なにせ、ここがゲームの中だというのだから、考えることが無いほ
うがおかしい。

なんで俺はゲームの世界に入れられたんだ？

なんのために？

ここがゲームの中ということはさつき俺が襲われたバツタは、
モンスター魔物で、このクリフが放った火の玉は魔法ということなのだ。

日本の常識じゃありえないことだったが、ゲームの中だといわれ
たら納得できる。

じゃあ俺はどーゆー扱いなんだ？
レベルも無いような商人なのか？

それとも俺が使い込んでいたキャラそのままなのか？

ギヤスパルクの復活の中じゃ俺は、俺の使っていたキャラはそこそこレベルが上がっていたはずだ。

せめてステータスウィンドウ「パツ」さえ見れば・・・

「おい、マサト、ステータスウィンドウなんて道で開けるもんじゃ・・・」

え？なんのこつちゃ？クリフが俺の隣をみて固まっている。
隣？

「うおっ?!」

俺の隣にはゲーム「ギヤスパルクの復活」で何度も見たステータスウィンドウが開かれていた！

なにになに・・・

どうやら見たところ俺がつかいこんでいたキャラをそのまま俺が受け継いでいるようだ。

つてことは、技とか使えんのかな？・・・

「マサト・・・君はいつたい何者？・・・」

やっと体の硬直が解けたクリフが訝しげな目で俺を見てきた。

「え？ああ？すみません！今閉じます！」

そうやって俺が隣を見るとそこにはもうステータスウィンドウは無かった。

SCENE 1 そんな簡単に信じられるはずがないだろ?!ゲームの世界だなく

改めて読んでみると・・・とんでもない駄文ですねw
感想をいただけたら幸いです。

SCENE 1・2 出会い(前書き)

連続投稿です。

SCENE 1 - 2 出会い

ゲームの世界に来た。来てしまったという事実をつきつけられた翌日。

俺は王都ガライアの城の一つの部屋にいる。クリフに言われて昨日はここで一泊した。

まあ、こっちの世界では俺の家なんぞあるわけもないし、助かるのだが。

野宿なんて無理だって……。

一日して分かったことがいくつもある。

まず、なぜ俺がここに呼ばれて王様なんかと会わなくちゃいけないなったのか。

それはクリフから言うとな俺のレベルが桁外れで高いらしいのだ。日本のゲーマーからしてみれば普通のレベルだと思うのだが、こっちの世界だと、とんでもなく高レベルらしい。

次に、俺はステータスこそゲームのものを受け継いでいるが、持ち物は受け継いでいないようだということ。

俺はこっちに来てても学生服のままだし、荷物も、なにか入ってそうな袋すら見当たらない。

もちろん武器も持っておらず、ろくな装備ではなかった。でも元からの防御力が高いため、昨日のバツタからの攻撃も

たいしたダメージにならなかったのだろう。

昨日でくわした、<トノサマバツタ>はそーとーなザコキャラだったの、ということもあるだろうが。

程なくして、クリフがやってきた。

「起きてるか？マサト」

「ああ、いくらなんでもこんな時間まで寝てねーよ」

時刻はもう昼過ぎ。

クリフは昨日と同じ騎士のような格好・・・いや、騎士だからいいんだけど。

をしていた。

昨日は鉄仮面をしていて、顔が一部しか見れなかったがそれがなくなっていて、青年的顔立ちをしているのが分かる。

イケメンだこんちきしょう。

「王陛下との謁見の時間がとれた。あと1時間といったところだな。」

「それはいいんだけどさ、俺ってこの格好でいいわけ？」

俺は昨日と同じ学生服だった。

こんなことを言っておいてなんだが、俺は他に服を持っていない。

まあ、荷物が無いんだから当然なのだが。

「ああ、大丈夫だろう。良いとは思わないが、他に服を持っているわけではないんだらう？」

「ああ、生憎な。」

昨日、クリフには少し話をしてある。

とはいっても別にここがゲームの中だとかいう話はしていないが、自分がないも持っていないことや、ちよつと違うところから来たことなどだ。最初は驚いていたけど、俺の格好を見て納得してくれたらしい。

「にしても、すごいな俺なんか身元のわからない奴に王様自ら会ってくれるのか？」

「ああ、前もって君のステータスの話はしてあるからな」

あゝ．．．なるほどね。

「それと、謁見までの時間なら外に出てもいいそうだから、好きに街を見てきてくれてかまわないぞ」

「おおゝ．．．って言っても金持っていないんだが．．．」

「大丈夫だ。見てくるだけだから」

．．．買えないんかい．．．

@

朝食は城のほうで食べさせてもらったので
腹ペコではない。腹ペコではないのだが……

「うわあ！めっちゃうまそー！ー！！！」

商店街に並ぶ数々の飲食店から良いにおいがしてきてたまらない。
食べ物は日本とは違うようで、最初は抵抗があったが
意外と慣れてきて逆に美味しいと思う食べ物も増えてきた。

「くっそう……金ないんじゃないにも食べられないじゃないか……」

学生時代にも金欠状況という状況には何度も味わったが、
今回のこれはそれ以上だ……
なにせ金が全く無いのだから。
この状況をどうにかできないものか……

その時俺に一つのアイデアが浮かんだ

「ハッ？！……なら稼げばいいじゃないか！！！」

@

クリフは外に出て良いと行ったのだ。
別にフィールドに出ちゃ悪いとは言っていないので大丈夫だろう。
ということであは沼地のフィールドに来ている。

金を稼ぎに！！

「ウリヤリヤリヤリヤリヤ！！！！」

出てきたモンスターを片っ端から倒して行く。素手で。
だってしょうがないだろう？！武器買うような金はないのだから！
ってかその金を稼ぎにきてるのだから！

このへんのモンスターは<ポイズンスラッグ>と言って、
ベトベトの粘液をまとったナメクジのようなモンスターだ。
確かゲームの中ではたいしたレベルじゃなかったはずだ。
といっても、特殊攻撃として、麻痺毒とダメージ毒を食らわせてく
るので

油断してるとまずい。

俺は自慢のAGIアシリチエイで素早く魔物の後ろに周りこみ、
一匹ずつ殴って倒していった。

<ポイズンスラッグ>は動きがのろいので、
後ろに周りこむことは案外簡単だった。

さっきっから、手が粘液でベトベトになってるのは頂けないけどね・

・
・
ネトネトして気持ち悪いったらありゃしない。

「うらあ！」

一発拳を入れるとくポイズンスラッグのHPバーが瞬く間に真っ白になり

うめき声を上げて液状になっていく……っ

「おいおい……金が粘液まみれって……マジで勘弁してよ……」

そんなところにリアリティ求めてねえよ!!

@

20分ぐらい経っただろうか、
周りにポイズンスラッグはいなくなっていた。

悲鳴がしたほうを目指して走っていくとそこには尻餅をついている一人の女・・・の子?と・・・

「<オールドスラッグ>・・・」

そこにはさつきまでの<ポイズンスラッグ>とは比にならないほどの巨大な

ナメクジが少女に迫っていた。

頭上に表示されるモンスター名は、<オールドスラッグ>

この地帯に稀にでるボスモンスターだ。

動きは遅いものの、強酸、猛毒の広範囲攻撃があり、なめてかかると全滅の恐れがあるモンスターだ。

「大丈夫か?! ほら立って!」

「ア・・・アア・・・」

少女はこの巨大なモンスターを見て腰を抜かしてしまっているようだった。

このままここにいたら、狙われちゃう!

「ちよつと失礼する!」

そう言うが早いか俺は少女をお姫様抱っこ?し、少し後方まで逃げてそつと少女を降ろした。

「これで一安心・・・なわけないか」

後ろを見るとすでに<オールドスラッグ>が追ってきていた。正直ここまでデカい相手に素手で戦える気はしない。

「使える魔法あつたっけなあ・・・」

俺は魔法使い職ではないが、ちよつとだけ攻撃魔法を覚えている。といつてもそこまでの威力はないんだけど・・・

「もうしょうがねえ！<エアブラスター>!!!」

<エアブラスター>は風属性の単体攻撃魔法で、

レベルは中級と言ったところか・・・俺の中では最強魔法なんだけどね・・・

ああ・・・MPマジックポイントめっちゃ減った・・・

俺がそう叫ぶと俺の手から緑色の刃のようなものが二つ出てきて、<オールドスラッグ>を切り裂く！ おおコレカッコイイ・・・

「ギガガガガガ・・・」

避ける事ができずにモロに魔法を受けた<オールドスラッグ>は呻き声を上げて液状になっていった・・・

正直、魔法に自信はなかったのだが、俺自身のレベルが高かったのでどうにかなったようだ。

いつもどおり粘液まみれのGを回収して・・・
とりあえずさっきの女の子のそこ行くか・・・

「あ・・・あの・・・」

「あれ？」

今行こうとしてたのに、むこうのほうから

来てくれたみたいだ。表示されている名前は……シオリ
日本名だなこれは……。いや、そう断定するのは早い気がするけど
そんな気がする。黒髪黒瞳だし。
この世界では黒髪黒瞳は珍しいと言っている。
ほとんどの人がいろんな色の髪をしている。

「た、助けてください……あ、ありがとうございました」

シオリは蚊の鳴くような小さな声で喋った。

容姿は肩にかかるぐらいの髪で黒髪黒瞳、
髪には小さめの細い紐のリボンが二つ、それぞれ正面から見ただけ
こについていた。

「いや、大丈夫だよ、そつちこそ大丈夫？怪我はない？」

見たところHPバーは減っておらず、どうやら<オールドスラッグ
>のデカさ
と気持ち悪さに腰を抜かしてしまったのだろう。

「だ、大丈夫です……」

うん、一言で言うなら「美少女」だ。

普通に可愛いぞこの子！

「ところで……君はここでなにをしていたの？
名前が特徴的だけど……もしかして日本から来たりしてない？」

俺の「日本」という単語にピクン！とシオリの肩が動いた。

こりゃあどうやら日本人で間違いないみたいだな……
格好はこの世界の人たちとなんら変わりなかったので最初は気付か

なかったが

むこうは俺の着ている学生服で気付いていただろう。

「マ、マサトさんも日本から来たのですか？」

「そうだよ、俺は日本では高校1年生だった。君は・・・シオリちやんでいいのかな？」

どうしてこの世界に？」

俺がこのことを聞いたのには訳がある。

俺のほかにもこっちの世界にきたやつがいるなら、俺と同じように訳もわからず来たやつばかりだろう。でもこの子に聞いたのはそういう意味じゃない。

もともと、このゲームを少女がやっているなんてこと自体が珍しいのだ。

もしかしたら趣味なのかもしれないけど、喋っている雰囲気からしてそうでは無い気がする。勘だけど・・・

「わ、わたしは・・・あ、兄がこのゲームをやっていて、そのデータの一つに私も入れてもらってやっていたのです。わ、私がやることはあまりありませんでしたが、あ、兄が私のも使って2つ同時にやっていました。」

へえ・・・

でもそれじゃあなんでこの子がこっちの世界に来たんだ？・・・

「それで訳もわからずこっちの世界にいきなり？」

俺の質問にシオリちゃんは少し寂しげな表情をしたあと、

「わ、私の兄が、ゆ、行方不明に・・・なつたんです。そ、それで兄の部屋で付いていたこのゲームを、わ、私が私のデータを使って少し動かしてみたのですが・・・」

そこまで言うと、シオリはそのまま俯いてしまった。

まあ、多分そしたら引き込まれたのだろう。

「大体分かったよ。・・・で、シオリちゃんはこれからどうするの？」

俺としてはもう少し話しがしたい。なにせ、こつちの世界で会った初めての

日本人なのだから。

正直俺は俺以外にこつちの世界に来てる人はいないんじゃないかとも思っていた。だからこれは大きな出来事だし、色々な情報が手に入るかもしれない。

「そ、そのことについてなんですけど・・・」

「ん??」

シオリは俯いたまま続けた。

「ず、図々しいとは思いますが・・・マ、マサトさんについていかせてもらっては・・・だ、ダメでしょうか?」

こんな女の子に「ダメでしょうか?」なんて言われて「ダメ」なんて言える高校生がいたら見て見たいわ。

そいつは絶対男じゃねえ。

「いいよ！俺もそうしようかと思ってたし。」

俺がそういうとシオリはパーツと明るくなってこちらを見てきた。
本当に美少女だこりゃ

「じゃあ俺の本当の名前を覚えておくれ。俺はかぶらまひて鎧正人だ」

「わ、私は、は、はるかぜ春風汐理しきりと言います。よ、よろしくお願いします
！」

なにはともあれ、これで仲間が増えた……のかな？

「……ってヤベっ！あと15分じゃん！汐理！急いでガライアまで
行くぞ！」

「が、ガライアですか？」

「そう！王様と謁見するらしい！」

「へ？」

二人でガライアまでの道を急いだ。

SCENE 1・2 出会い(後書き)

オリキャラです。

ユウゴたちはもう少し先になりそうです。

SCENE 1 | 3 登場人物のステータス（前書き）

非公開だった正人のクラスなどを公開します！

SCENE 1 | 3 登場人物のステータス

かぶらまなこ
（ 矯正人 ）

Class

ファドラガンナー

LV 71

HP 621 / 621

MP 309 / 309

AGE 15

SEX 男性

RACE 人間

STR 443

VIT 312

DEX 781

AGI 746

INT 202

WIS 179

LUK 168

― 備考 ―

正人のクラス「ファドラガンナー」とはその名の通り風神ファドラ
の加護を得た
銃^{ガンナー}使いのこと。

風属性魔法なら少し使える。

主武器は銃で、弓矢も使える。

DEXとAGIが高い。

～^{はるかぜしおじ}春風汐理～

Class

トラップチーフ

LV 52

HP 511 / 511

MP 628 / 628

AGE 11

SEX 女性

RACE 人間

STR 187

VIT 190

DEX 658

AGI 423

I	N	T
1	4	1
W	I	S
6	9	1
L	U	K
3	2	2

―備考―

汐理のクラス「トラップチーフ」とは盗賊^{チーフ}の派生系で、
確率魔法に分類される、罾^{トラップ}魔法を得意とするクラス。

それ以外の魔法も状態異常回復魔法なら使える。

主武器はダガーで軽い剣なら扱える。

SCENE 1 | 3 登場人物のステータス（後書き）

オリキャラを出す事があつたらこのように
ステータスを紹介していきたいと思います！

SCENE 1 - 4 謁見(前書き)

原作知識が薄れていて、時系列が思い出せない・・・

SCENE 1 - 4 謁見

汐理との思いがけない出会いを果たし、
俺たちはガライアへの道を少し急ぎながら歩いていた。

「あ、あの正人さんはいつこっちに来たんですか？」

「正人、で良いよ」

隣を歩いてるこの子が汐理。

聞くと年齢は11歳だという。

11歳って何年生だ？・・・

しかし、そんな小さな体型とは裏腹に、エターナルでの
ステータスはLV52のトラップチーフだと言う。

トラップチーフといえば盗賊系の派生系で罠を得意とする職業だっ
たはずだ。

昨日俺がクリフにされた反応からして、汐理もかなりの高レベルな
のだろう。

つと、質問に答えてなかったな。

「俺は実は昨日なんだよ。だから武器もなにも持ってないわけ。」

「そ、そうなんですか。」

「汐理は今さっきつてわけか。」

「そ、そうなります・・・」

いきなり転生させられて初めてみるモンスターがあれじゃあ
可哀想だな・・・

あ、汐理にこれからなにをするのかを言ってなかったけな・・・

「汐理は今からなにをやるか、知ってるっけ？」

「え、謁見なされると聞いていましたが・・・」

11歳なのに謁見を知ってるのか？

だとしたらすごいな・・・俺は知らなかった。

「そう、俺たちはこの先にある都市、王都ガライアの王様

ガルガンシア王に会いに行く。って言ってもなにをするのか知らないんだけどね・・・」

「え？それって、よ、呼び出されたということですか？」

俺の発言に汐理は困惑した表情を浮かべる。

「いや、昨日俺がこっちの世界に引き込まれた時になにが起こったのか分からなくて

魔物に襲われていたんだけど」

実はザコキャラでした！なんて口が裂けてもいえない・・・

「その時に助けてもらった人がガライアの騎士でね、

俺のステータスを見せたら王様に会わせたい・・・と言ってきたわけ」

汐理は「な、なるほど」と言ったあと
前を向いてなにかを考え始めたようだった。
まあ、俺より来て時間が経ってないわけだし、
しょうがないよな・・・

そうこうしてるうちにガライアまで着いた。

「ここが王都ガライアだよ・・・ってまあ、俺もここにきて全然経
ってないんだけどね」

俺が一応ガライアを紹介すると、

汐理は感動したと言った表情で街を眺めていた。

俺もクリフに連れられていた時はこんな表情してたかもな。

そのあとも、汐理と話をしながら城へと向かって歩いていった。

「エルトリーゼ様！昨日申し上げました、例の者達を連れてまいりました！」

少し狭めの客室に、クリフの声が響く。

そうして向こうの扉から出てきた人は・・・人？

いや、あれは・・・エルフだ。

耳が長いのですぐにわかった・・・けど、エルフってこのへんにいたっけ？・・・

「私がエルトリーゼ・ウィンラートだ。陛下に仕える宮廷魔術師の一人である。」

いかにも「できる女」といった雰囲気をもった人・・・エルフだった。

金髪の長い髪を後ろでまとめて、長く降ろしている。

マントのようなものを羽織っていて、かなり魔法使いとしてもレベルが高いんだろう・・・推測だけだ。

「マサトです。で、こっちが・・・」

俺が視線で汐理を促すと、

「し、シオリです。」

やたら緊張してるな・・・

「君はかなりの高レベルなのだと、クリフから聞いているんだが・・・それは本当か？失礼だとは思いますが、ステータスを見せてもらってかまわないか？」

エルトリーゼさんはまだ疑っているようだった。
まあ、無理もないだろうな。

「はい大丈夫です。」

そういうと俺は心の中で「ステータスウィンドウ」と呟く。
どうやらこれだけで、ステータスウィンドウは開けるらしい。

汐理にもこのことは伝えてあるので、開くことはできるだろう。

エルトリーゼさんは俺たちの開いたステータスウィンドウを見て、ものすごく驚いていた。どうやら信じてなかったみたいだな。

「マサトが高レベルだとは聞いていたが、シオリまでとは・・・分かった。ガンガルシア陛下の所まで案内しよう。付いて来い」

エルトリーゼさんは俺たちに有無を言わせぬ口調でそういうと颯爽と身を翻して扉のほうへ歩いていった。

これだけで終わったってことはどうやら確認だけだったみたいだな。確かにそんな嘘について王に直接会おうとするやつもいるだろうし。そんなことを考えながらエルトリーゼさんを追った。

@

今度は広くきらびやかな広間に通された。

廊下を通っているときにも思ったけど・・・
城だからと言って、やたらと装飾がしてあるわけではない。
かといって、ちょっとしたところに絵画が並んでいて

貧相な感じは全くしなかった。

こういふ面から見ても、街の活気から見ても
ここの王様はかなりの人格者なんじゃないかと思う。

少し行ったところに玉座があり、そこに座っているのが
王様だろう。その隣にいるのは誰だ？・・・つつ？！

「が、学生服・・・！」

俺の後ろを歩いていた汐理が先に言葉を発した。
そう、王様の隣にいる女性は女子高校生お馴染みのセーラー服を着
ていた。

「君がマサト君か。余がガンガルシア三世である。」

おお・・・見た目からしても風格のある人だ・・・
頭の上には少し小さめな王冠が乗っていて、
さっきのエルトリーゼさんのとは違うが大きめのマントを羽織って
いる。

歳は・・・50、いや60ぐらいだろうか。

「はい私がマサトです。こっちにいるのがシオリ。
お目にかかれて光栄です陛下。」

最初はこの人の持つ特有の威圧感に押しつぶされて、
言葉が出なかったが、すこし慣れてきた。

「自己紹介が終わったところで早速なんだが・・・
単刀直入に聞こう。君たちはニホンという異国から来たのかね？」

え？・・・この人日本を知ってる？

いや、違っだろう。今なんとなく日本の発音が怪しかったし、おそらく隣にいるセーラー服の人が教えたんじゃないだろうか。

「はい、そうです。」

「やっぱりね。」

俺の返答に反応したのは、隣のセーラー服の人だった。

黒髪をカチューシャでかきあげて、髪は肩ぐらいまでかかっている。腰には長剣が鞘に収められている。

「申し遅れたね。私の名前はナツキ。」

旭日騎士団と呼ばれる、二ホンジンで組まれた組織のメンバーよ」

旭日騎士団？・・・それがどういうものなのかは分からないが

日本人で組織しているということは

高レベルの人たちの集まりなのかもしれない。

「聞きたいのだが、君たちはなんの目的を持って旅をしているのかね？」

あんれえ？話行ってないのかな・・・

俺たちがエターナルに来たのが昨日なので目的なんてあるわけないし、

そもそも旅なんてことをしてるつもりすらない。

「えっと・・・私たちは、まだこちらに来たばかりで、

目的などは特にありません。強いて言うなら、日本に帰ることです

かね・・・」

そう言うとナツキさんの目が少し鋭くなったが、王様は特に表情は変わらなかった。

「そうなのか・・・ではこちらから提案があるのだが・・・ナツキ君」

「はい。簡単に言うとね、君たちに旭日騎士団のメンバーになって欲しいの」

や、やたら説明を省いた気がするんだが・・・

「あ、あのいきなりの提案で旭日騎士団がどのようなものなのかも分からないので
さすがにすぐには返答できないんですが・・・」

「うむ。そうだな。ならこのナツキ君から話を聞いたほうがいいだろう。」

君たちにはこの城で少しの間住むことを許可する。

ナツキ君から説明を聞いて、それで入るか決めてほしい。

余もそこまで騎士団については詳しくないのでな。

入るかどうかが決定したら、また報告してくれ。」

住むところのあてがなかった俺たちにとってはありがたい話だ。

「わかりました。」

「うむ。ではナツキ君。この戦士たちと少し行動をとみにしてくれ。決定したことがあったら余に報告して欲しい。」

「分かりました」

そう言うってから最後にガンガルシア王は俺たちの方を向いて

「君たちには多いに期待している。頼むぞ異国の戦士たちよ。」

な、なにを頼まれたかすら分からないんだが……

「はい」

ナツキさんがそう答えて謁見は終了となった。

SCENE 1 - 4 謁見（後書き）

エルとナツキを出してみました。

お気軽に感想を書いてください。

自分のためになると思っているので、ダメだとしてもお願いします！

SCENE 1 - 5 旭日騎士団（前書き）

原作で、ナツキの日本名って明かされてないですよね？

勝手に決めてしまっただけの良いのでしょうか・・・

もしこの作品が続いている途中で明かされたら
編集するかもしれません。

SCENE 1 - 5 旭日騎士団

ガルガンシア王との謁見を終えたあと、
俺たちはナツキに案内されて、城の中にある
一つの客室に案内されていた。

部屋はたいして大きくないが、
客室ということを考えれば
充分広いと言える広さだった。

「とりあえず、座って」

ナツキに促されて俺と汐理は客室の中心にある
テーブルの椅子に座った。

「とりあえず、さつきも言ったけど私はナツキ
日本名は皆川夏喜よ。」

旭日騎士団っていう騎士団のメンバーで、
そのことをこのガンガルシア王に話してる途中に君たち
マサト君たちの話が入って、日本人じゃないかなって思って
謁見してるところにもいさせてもらったわけ。」

なるほど、だからナツキさんに対する王様の口調も
俺らとあんまり変わらなかったのか。
そもそも仕えてるならあんな風に隣になんかいないか。

「そうですか。それでその旭日騎士団というのは

どういったものなんでしょうか？」

「私達の目的はこのエターナルを滅ぼし、支配せんとする、同じく日本人の組織」

「教団を倒す、倒すとまでいかなくても、教団の脅威を色んな国に警告すること等ね」

「教団？・・・名前からして怪しそうな名前だな・・・」

「教団は魔神にして魔王、力の神とも呼ばれる<ギヤスパルク>の復活を目的としているわ」

「な・・・なんだって？」

隣をチラッと見ると汐理も俺と同じような反応をしていた。

「汐理はそこまでこのゲームに詳しくないが、話を聞いて理解できたのだろう。」

「そこで、私達はいま、エターナルに来た日本人を教団より早く騎士団に招き入れることをしているの。」

「教団なんかに入ろうとする人なんているのか??」

「それこそそんな目的を掲げているなら、善意のある人なんかは入らなさそうなのに。」

「教団ってのはそんな目的を持つてるっていうのに入ろうとする日本人がいるのか??」

俺の思ったことをそのままぶつけた疑問にナツキさんは

「あなたの言う事ももっともだわ」と前置きしたあと、

「でもね、確かに教団がそんなことを言いながら勧誘してたんじゃあ人は集まらないと思うけど、実はねあいつらは<自分たちにつけば日本に帰る方法を教える>と言ってるよ」

その言葉に俺は愕然とした。

だって・・・さっき俺「帰ることが目的だ」って言ったんだぞ？

もし、教団にそんなこと言われたら本当の目的も知らずに教団のメンバーになっていたかもしれない・・・

そんな俺の心情を見抜いたのが、ナツキさんはこう続けた。

「だから、そうして教団のメンバーになっちゃおう前に

先に私達から注意を促してるの」

なるほど・・・

「他の旭日騎士団のメンバーは？」

「今は私と同じように色々な場所で注意を促してるわ。」

なるほど・・・これならこの騎士団は信じられる気がする・・・

というより、俺たちはこれからなにをするのかも決まっていなかったし同じ日本人と行動できるなら願ってもないことだ。

ま、最初から断る理由はなかったんだけど。

「分かった。俺たちは<旭日騎士団>のメンバーになるよ。

汐理もそれでいいか？」

勝手に話を進めてしまったが、汐理に許可を取って無かった。

大丈夫かな？

「は、はい。も、もともと私は正人と行動を共にすると言っていたので

正人が入ると言うのなら、わ、私も入ります」

「へえ・・・？」

なにやらナツキさんがじろじろ見てくる。

汐理は俯いたまま固まってるし

なんなんだ？？

「とにかく。そーいうことなんで、入らせてくれますか？」

「当たり前でしょ！そのために私はあなたと話しをしにきたんだから」

「じゃあ、改めて自己紹介しておこう。俺はマサト、日本名は矯正人だ。ナツキさん

これからよろしく！」

「わ、私は春風汐理です・・・よろしくお願いします」

「私のことはナツキでいいわよ、二人ともこれからよろしく！」

かくして、俺は旭日騎士団のメンバーになった！

「ところでさ、俺らがメンバーになったこと団長とかに伝えなくて

いいのか？」

「あゝ・・・あゝ」

ん？ナツキがいきなり唸り声を上げている
いきなりどうしたんだ？？

「えゝつと、団長はいいから、副団長には私から伝えとくよ！」

団長の扱いひどいな・・・

なんでそんな扱いなんだ？？

そして、このナツキはけっこうテンションが高いんだな。

あれだ、あれ！クラスとかで言う活発系女子ってやつ？

「そ、それでナツキさんは私達のパーティーに加わるという事ではないのですか？」

汐理の質問は質問というより確認・・・だろう。

そう、このエターナルという世界では複数の人間が

グループを組織して色んなところに行ったりすることをパーティーというらしい

まあ、なんのゲームでもパーティーって言葉は結構聞くとするだけ
ど・・・

べつにパーティだからといって持ち物が共有されるってわけでもない
いんだけど、

決まりを作ってそーゆー風にしてるパーティーは多いらしいけどね。

「そうなるね。王様からも一緒に行動しろって言われてたし、そーゆーことになるかな。そーゆー意味も含めて、よろしくね」
ナツキってけっこう爽やかだな。

「それで、俺たちはこれからどうするんだ??」

まあ、この城に住むことになるって言うってたし、他の日本人搜索かな？

「そうだね・・・とりあえずこのまま日本人搜索を続けて、副団長と話ができれば、それからまた考えよう。それまではこの三人で行動だね！」

なるほど・・・まだ俺たちは情報が足りないから、ナツキに色々聞いて情報を得るとするか・・・

「じゃあ私はガルガンシア王に伝えてくるね！」

そう言い残すと、ナツキは駆け足で客室を後にした。

「お、思ったんですが・・・」

汐理と二人きりになってすぐ、汐理が話しかけてきた。

「どうしたの??」

「こ、これからは私たちが会う日本人全てが、み、味方じゃないっ

てことですよね」

そうだった・・・

教団という敵がいる以上、
これからは全ての日本人を疑ってかからなければならぬってこと
だ。

もしかしたら俺たちのことが教団に知れて、俺らに近寄ってこない
とも限らない。

でも・・・寂しいな、同じ日本人なのに、
こっちのエターナルの世界で殺しあわなきゃいけないなんて・・・

「そう・・・だね。これからは注意していこう」

汐理も俺と同じようにかなり悲愴な顔をしていた。
おそらく俺と同じことを考えていたのだろう。

これから始まることは俺は全く考えられない。
俺たちはなんのためにこのエターナルという世界に放り込まれたの
か？

こうして、殺しあうことなんか目的だったのか？

まだ、分からない

分からないことだらけだ。

けど、俺たちがここでくすぶってるわけにはいかない。

俺たちが戦うことで、少しでもこの世界のためになるのなら
戦うべきだろう。

今はそれが、俺がこの世界に放り込まれた理由、目的。
だったらその目的を真っ当してやるうじやないか。

「汐理、ここからは戦うことになると思う。
もしかしたら・・・いや、もしかなくても身を危険にさらすこと
になる」

それでも・・・俺についてきてくれるか？」

「はい。私は正人についていきます。日本に戻るまで、絶対に正人
のそばは離れませんよ」

そう言っつて汐理は微笑んだ。

めっちゃ可愛いぞおい・・・

「よし！じゃあ絶対俺は汐理を守ってやる！

これからもよろしく頼むぜ！」

「はい！」

汐理がこんなにハツキリと喋ったのは初めてかもしれない。

しかも汐理だつてレベルはすごく高いのだ。

俺なんかに守ってもらわなくてもと思つてもおかしくないのに
しっかり答えてくれた。

それがなんだか、俺にとっては一番嬉しかった。

SCENE 2 平和の尊さって失って初めて気付くんですね 春風汐理（前

お気に入り登録をしてくださった方々、
本当にありがとうございます。

発投稿の自分としてはとても感激です！

お気軽に感想をお願いします！

SCENE 2 平和の尊さって失って初めて気付くんですね く春風汐理く

初めまして、春風汐理です。

私はちょっと前まで市内の小学校に通う普通の、小学六年生でした。

全てが始まったのはあの日・・・

私は学校から帰って、いつものように読書をしていたのですが
いつまでたっても兄がリビングに顔を出さないのです。

私の家は兄と、私と母の三人でした。

母は仕事で帰ってくるのが夜遅く、

いつも兄と二人でいるのが普通でした。

兄妹仲も悪くはなく、むしろ良好と言ってよかった関係だったと思
います。

気付けばもう時計は夜の7時を回っていました。

普段なら、夕食の準備も初めて作り始めている時間です。

さすがに違和感を感じた私は、兄の部屋へと向かいました。

そこに待っていたのは、付けっぱなしの明かりと

不自然に投げ出されたゲームのコントローラー。

そして、付けっぱなしの、ゲーム。

兄の姿はありませんでした。

実際、その時はどこかに行ったのだらうと思い、ゲームは消さずに兄を探しに行きました。

トイレ、浴室、物置、玄関。

ついには家を出て、近くの公園まで。

どこにも、どこにも兄の姿はありません。

途方に暮れた私は、もう一度兄の部屋に戻りました。

兄の部屋はさつき見た部屋となにも変わらず、相変わらずゲームのBGMだけが虚しく響いていました。

私は兄の悪戯かと思い、兄の部屋の搜索を始めました。

この時は「兄が消えた」などありえないと信じて疑いはしませんでした。

(汐理・・・)

「?!お兄ちゃん?!」

突然聞こえた兄の声に私は敏感に反応します。

(し、汐理・・・)

消え入りそうな小さな声。

普段の兄からは全く想像もつかない声。

「お兄ちゃん!?!どこなの?!」

(僕は・・・ここにいるよ・・・)

それだけ言って兄の声はまた聞こえなくなりました。

しかし、私は感じていました。

今声が聞こえてきたのは、

この・・・ゲーム。

このテレビからでした。

「お兄ちゃん・・・ここに・・・いるの?」

私の質問に回答する兄の声はありませんでした。

しかし。

いつのまにかさっきとは、

テレビの画面が変わっていました。

私も兄といっしょに少しだけこのゲームをやったことがあります。

この画面は・・・最初のゲームを始めるセーブデータを選ぶ画面。

私の兄は優しく、私がゲームをやらなことを分かっているのに

わざわざ私のデータを作って兄が進めてくれていました。

そして、私はコントローラーに触っていないのに、セーブデータを
選ぶ画面に映るカーソルは
データ2の「シオリ」をさしていました。

まるで「選べ」とでも言うような画面に、
私は背筋が寒くなるのが分かりました。

恐る恐るコントローラーを手に取り、決定を示すAボタンを私は押
しました。

押してしまった……のほうか正しいかもしれません。

(汐理……ごめんな)

兄のその声が聞こえたかと思うと、

私の視界は白い光だけに埋め尽くされていました。

@

ナツキと会ってパーティーを組んでから一週間ぐらいが経ちました。

私達が今いるのは王都ガライアの商店街の中です。

「んゝ……しっかしやっぱそう簡単に日本人なんて見つからないか……」

隣を歩いているこの人は、正人。

エターナルに来ていきなり死んでしまいそうなところを助けてもらった命の恩人です。

私はこの正人についていくと決めました。
その理由は命の恩人ということもあるのですが、
この人・・・似ているのです。
行方不明になった私の兄と。

ですがそんな理由を話せば、正人に愛想をつかされてしまうかもし
れないので、
このことは言っていません。

「んっ・・・まあ、あなたたちの情報を手に入れるのにも一苦労だ
ったからねえ」

この人が、ナツキ。
旭日騎士団という日本人で構成された騎士団のメンバーで
私達をスカウトした人です。

私達、正確には正人と私ですが、
ナツキにスカウトされて、旭日騎士団に入りました。

なんでも、このエターナルを滅ぼそうとする教団なる組織があると
か・・・
それに対抗するために、高レベルの日本人を教団より先に
スカウトして旭日騎士団に引き入れようとしているのです。

これがそう簡単なことではなく、
こうして歩いて情報を仕入れるところから始めなければならないの
です。

今日も搜索してもそれらしい人影や、
いい情報を手に入れることはできないでいました。

「じゃあ、今日もちょっと外でるか？」

「そうね、後々のためにもそのほうが良いと思うし」

「あ、ありがとうございます」

外に出る・・・というのは、
フィールドに出るのであって、

目的は・・・恥ずかしながら私の修行です。

私も日本人で、兄がこのキャラを使ってプレイしていたので
レベルは低くないのですが・・・

画面で見るモンスターと本当に相対するモンスターとでは
比べ物にならないほど違うのです。

迫力、こちらを本当に殺そうとする殺意、
威圧、威嚇。

最初にこれをモンスターから受けたときは、
腰が抜けてしまって、戦うなんてこと、考えもできませんでした。

これでは、いくらレベルが高くて、

攻撃できなきや意味が無い。

そう考えたナツキと正人がたまにこうして

ワールドに一緒に出てくれて、

私のモンスター慣れを手伝ってくれているのです。

私もパーティにいる身として、

お荷物では嫌なので助かるのですが、

この時点でお荷物な気がして怖いのです。

「いたぞ！」

正人の声にハツとしてそちらを向くと、

数多くのこうもりがこちらに向かってきてるではありませんか！

表示されている名前は・・・<ストームバット>

「や、厄介ね。魔法使い職がない私達にとってみればちよつと骨がおれるかもよ？」

「一応回復用スペルスクロールを持ってきてるし、

俺は風魔法を使う！戦ってみよう！」

スペルスクロールとは、魔法使いが魔法を巻物のようなものに保存しておくものです。

これは商店などにも売っていて、

魔法使い職のない私達にしてみれば、必須アイテムなのです。

「<ウインドウブラスト>！」

正人が風属性の範囲魔法を唱えます。
前方の群れのHPが下がりますが、
ゼロになったのは一匹もいません。

「よし！」

今度は正人が両腰に付けたホルスターから二丁拳銃を取り出し、
一匹ずつ打ち落としていきます！

早い！ストームバットたちが次々に断末魔の叫びを上げて落ちていきます

「じゃあ私も・・・<ソニックブーム>！」

ナツキが自身の長剣を抜き放ち

同時に鋭く振りぬくと、放たれた青い衝撃波がストームバットに当たり、

墜落させました。

「汐理！」

「はい！」

私も、別にその二人の技をただ見ていたわけではなく
ちゃんと技の準備を整えていました。

「ふ、二人とも退いて！」

私が声をかけると、二人は勢いよく後ろに下がり、

二人がいた場所にストームバットの群れが集結します。

「^{トラップ}畏くネットバインド>！発動！」

私の職業は^{クラス}くトラップチーフ>と言って
^{トラップ}畏という確率魔法とダガーの扱いを得意とするクラスなのです。

この技は集団の敵に対して、一定時間拘束する効果を持ちます。

私が叫ぶと、私が準備しておいた左右のトラップツールから、
大きな透明の網が飛び出しストームバットたちの動きを拘束します！

「^{トラップ}今だ総攻撃！」

私もダガーを引き抜き、網にかかったストームバットたちに斬りかかりました。

@

「いやあ・・・ダメージゼロだったね」

ナツキが苦笑しました。さっきの戦いでHPの消耗はゼロ。被害はありませんでした。

「汐理、モンスターにはだいぶ慣れてきた？」

正直に言うと、まだ怖いです。

でも、これ以上二人に迷惑をかけるわけにもいかないし、全く改善されてないかというところでもないのです、

「は、はい。もう、だ、大丈夫だと思います・・・」

「ん、じゃあこれからは少し感覚を空けて定期的にやるとしよう。」

正人は私の意志を汲み取ってくれたらしく、私の望む返答をしてくれました。

本当にお兄ちゃんみたいですよ・・・

「じゃあ一回ガライアに帰って、今日は休もうか」

今まで暮らしていた、平和な日本が
どれだけ貴重なものだったか、
こうもしないと分からないなんて
皮肉もいいところだと思います・・・

え？「お前よく喋るんだな」って？？

わ、私の頭はいつだって高速回転してるんです！

ただ、言葉にして発するととなると、頭の回転が早すぎて言葉を選ぶのに時間がかかってしまうというか・・・

SCENE 2 平和の尊さって失って初めて気付くんですね 春風汐理（後

ナツキの職業も明かされてなかったですね・・・
剣を持っているとしか分からないだなんて・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2757z/>

もう一つの「ろーぷれわーど」

2011年12月11日21時54分発行